

表彰状を頂いて

著者	半田 孝司
雑誌名	静岡地学
巻	69
ページ	3-4
発行年	1994-06-12
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025310

表彰状を頂いて

半 田 孝 司*

草木の緑は、たいへん美しい。忘れることなく季節の変化も教えてくれる。本会の事務局に長く関わってきたことを振り返ってみると思い出深い。桜が咲くと運営委員会、そして会誌の編集と総会の開催、暑い巡検会が済み、夏休みが終わると、また運営委員会、そして会誌の編集と秋の年会開催、これを季節の移り変わりのように淡々と捉えてきた。そして年月が流れた。しかし、私にはこの年月が長いという感覚があまりない。ただ、緑や花に急かされて、気が付いたとき30年経ってしまっていたというわけである。この間、紆余曲折がなかった訳ではないが、会員の皆様に助けられてこれまで過ごすことができ、いささかなりとも、本会のお手伝いのできたことを幸いとうけとめている。

昨年6月、総会後の30周年記念パーティの席上で、会の発展に寄与し、貢献したとのことで立派な表彰状を頂戴した。事前に、このことを会長から聞かされたとき、頂くべきでないと考え、即「お断りしよう」と思った。だが、ものの10秒も経たない内に出すべき言葉を呑み込んでしまった。待てよ、自分はこれまでに表彰状なるものを頂いたことがあっただろうか。また、これから先頂けるだろうか。としたならば、少々大げさであるが、一生に一度かも知れない。一瞬の結論である。この際、ただいとおこう。まことに単純な浅はかな考えであり、厚かましいことではある。かくして、表彰状をわが家へ持ち帰って、家族に事の子細を述べながら見せた。娘達は「ふうん、すごいね」とは言ったが、あまり関心は示さないふうであった。女房どのは早速、額に入れてくれたが、私はこれを飾る気になれず、今でも、部屋の隅に置いたままになっている。

いつのことであったか、天皇・皇后のTV記者会見の様子が放映された。美智子様のこれまでを点数で表すと何点ぐらいか、の質問にたいし、天皇はにっこりと笑顔で「点数で表すのは難しいが、まあ努力賞」だとお答えになった。では、天皇様は何点か、の記者団の問いに美智子様は、これまで何とか過ごしてこれたのも陛下のお導きのおかげであると、微笑みをうかべ、「やはり、わたくしも、お点ではなく感謝状を」と述べられた。このときのことを何故か思い出す。

勤務先を短大に移して3年目を迎えたが、曲がりなりにもこれまで過ごせたのも、地学会を通じて多くの優れた人との出会いに恵まれ、あらゆる機会に数多くの“単位”を頂いたからに他ならない。この中には様々な“科目”が含まれている。話し方、聞き方、会誌編集時など、他人の文章にたいする注文（自分のものは棚に上げて）、付函に対しての文句（勝手に書き直したりした）、やれ締切りが過ぎたと平気で批判するなどなど。また、編集作業が手に余り、時を忘れるなどなど、女房どのが認めない単位も結構あった。しかし、私自身にとっては、すべてが有用な単位であったと思う。今、短大生を前に、したり顔で接することができるのも、多くの方から賜ったご指導が基礎となっていると思う。表彰状を頂いたお礼に感謝状を差し上げなければならない心境である。

*常葉学園短期大学（運営委員・元事務局員）

機関誌「静岡地学」の表紙の題字のこと

会誌の題字は初代会長であった故佐々倉航三先生の“作品”である。先生が気候学の大家であることはさておき、お人柄がなかなかユニークであった。お世話になった頃が懐かしく、この題字を見るたびに思い出される。

創刊号を出すとき、表紙の題字を先生にお願いすることになった。そのころ、雑誌の題字は筆文字が多かったように思うし、また、先生が日頃、筆に親しまれているのを知っていたからである。発足当時、会員への通知状や会誌送付の宛名書きをよく手伝って下さった。郵便局の窓口で、黒々と書かれた格調高いものが半分、もう半分は私の下手なペン書き、余りにも対照的で気がひけたものである。

さて、静岡地学の題字の原稿をお願いしたところ、数日して「上手く書けないよ」と言われながら差し出された。見ると新聞の折込広告の裏に書かれたものだった。いくら節約といっても紙がなかった訳ではないし、意外だったのでお礼も申し上げず、軽く頭を下げて受け取った。大先生も緊張したのである。誰でも真新しい紙に向かうと、かえって構えてしまい、筆が滑らないものである。不要な紙ならば、練習のつもりで楽に書け、上手く仕上がるのである。当時、先生の研究室は私が掃除する習慣になっていた。片隅の屑籠を覗くと何回も書いたらしい、丸めた紙が捨ててあった。この事を秘密にしていたのは、もちろんである。叱られそうだが、もう許していただだけよう。私も、いつしか、

当時の先生と同じ年齢になっていることに気付いた。やはり、30年は長いのかも知れない。会誌のうすい緑色の表紙は創刊号から全く変わらない。あの題字とともに、何時見てもさわやかな印象である。変わらないものと、変えるものと交差させながら、時代にふさわしい本会の発展を期待してやまない。

